2023 年 3 月 15 日（毎月 15 日発行）第 865 号　　1966 年（昭和 41 年）8 月 30 日第 3 種郵便物承認 ISSN 0915-6038

komuna organo de KANSAJA LIGO de ESPERANTO-GRUPOJ, KJUŜUA ESPERANTO-LIGO, ESPERANTO-LIGO de TYÛGOKU kaj SIKOKU

La Movado

komuna organo de KANSAJA LIGO de ESPERANTO-GRUPOJ, KJUŜUA ESPERANTO-LIGO, ESPERANTO-LIGO de TYÛGOKU kaj SIKOKU

Fondita en 1951　　N-ro 865 marto 2023

komuna organo de:

KANSAJA LIGO de ESPERANTO-GRUPOJ
Sone-higasi 1-11-46-204, Toyonaka-si, Ôsaka-hu, 561-0802

KJUŜUA ESPERANTO-LIGO
2-190, Sisaido, Tarami-tyô, Isahaya-si, Nagasaki, 859-0407, Moriwaki Yasumasa

ESPERANTO-LIGO de TYÛGOKU kaj SIKOKU
Sinhama-tyô 2-4-18, Marugame-si, Kagawa-ken, 763-0063, Kosaka Kiyoyuki

ENHAVO

第 21 回中国・四国エスペラント大会オンライン 4 日間 …… 木谷 奉子 1-2
Kurantaj Vortoj（不耕起栽培、ほか）…… 2
楽しい作文教室（139）…… 塚本 猛 3
書評 “Secesio” …… 伊藤 俊彦 4
Skize pri nia Esperanto-Movado en 2022 …… Redakcio 5
対訳: 源氏物語 第45帖 橋姫（13）紫式部/belmonto 6-7
Kajero Libervola: Mi faras miraklan saŭcon majonezon …… Tadaŝi Jamada 8
日本大会 La Unua Informilo …… 9-12
夢十夜（3）…… 夏目 漱石 / 沖 恵明 13-14
西尾務さん追悼：
永遠の西尾務さん …… 桜井 大二郎 15
学生時代から仲間の先頭に …… 三輪 博昭 15-16
『ダイナミックレイク琵琶湖から世界へ』の翻訳出版 …… 大西 真一 16
新しいことに挑戦し続けた西尾務さんを悼む …… 中道 民広 16-17
La Movado：各地の行事、他 …… 17
Vortkruca enigmo / 作文教室成績 …… 18
作文教室課題 /Mikspoto / KLEG事務局だより …… 19
編集ノート …… 20

第 21 回中国・四国エスペラント大会開催

オンラインで、2022 年 11 月 27 日、12 月 4 日、11 日、18 日の 4 日間

木谷 奉子（徳島県）

第 8 波の波がじわじわとおこりつつあるという状況の中で、安心して中国・四国エスペラント大会を開くにはオンライン大会にするしかないと決めたのは 9 月。準備時間不足で主催者の負担にならないように、各県エスペラント会が番組を分担することにした。また、一日中 PC 画面を見続けるのは参加者にとっては苦痛なので 4 日に分け、1 日 1 時間番組を開催することにした。

参加者は約 63 人。外国からの参加者は 5 人（台湾、インドネシア、韓国、ベトナム、ドイツ）。

（第一日目） 11 月 27 日午後 8 時～ 9 時 徳島担当

＜開会式＞

中国・四国エスペラント連盟会長の長町重昭会長、関西エスペラント連盟の木元靖浩会長挨拶動画のあと、“La Espero” 合唱。

＜ Belvirino de Naruto de Aŭa ＞　参加 39 人

徳島の伝統芸能阿波人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」の一場面をエスペラント字幕付きで流した。阿波人形浄瑠璃とは徳島県の各地に伝承されている義太夫節による三人遣いの人形芝居。

（第二日目）12 月 4 日午後 8 時～ 9 時 岡山担当

＜ Etaj novaj paŝoj en Okajama ＞　参加 47 人

岡山エスペラント会長のあいさつのあと福井政春さんの指導する山陽学園の 12 歳から 16 歳の生徒さんたちによる新鮮な作品を次々に披露。

１．ザメンホフの “Ho, mia kor’” の詩に生徒が３拍子のオリジナルの曲をつけたものを発表。若者が作曲した “Ho, mia kor’” を聞くと、現代風のザメンホフの姿が脳裏に浮かんでくるようだった。

２．山陽学園の生徒が「日々のおしえ」31 項目をエスペラントで紹介。生徒の真摯な生活ぶりを彷彿とさせる実に素朴でいて現代にも通じる教えだと思った。この教えは創立以来 55 年間校長として教育に携わった上代淑子氏の説かれたもので、彼女は岡山のエスペラント運動を起こしたガントレットの弟子であり、エスペランティストであった。

３．岡山紹介（桃太郎伝説をモチーフにして）

岡山に伝わる「温羅 (うら) 伝説」の温羅と吉備津彦の戦いは桃太郎の鬼退治の話の原型になるといわれ、鬼にまつわる鬼の城、吉備津神社、吉備津宮勧進帳等の遺跡が存在しているという紙芝居風の岡山紹介だった。

（第三日目）12 月 11 日午後8時～9時 高知担当

＜ Kelkaj lokoj kiujn turistoj malofte vizitas ＞

参加 37 人

地域に残る５名の知られざる偉人の逸話を、鍋島博之さんの巧みなプレゼン動画と会員の朗読で披露。

第一話：Ĉjohej sur senhoma insulo

第二話：Monumento por la homaro al s-ro Murata

第三話：Funebra Ceremonio de Ĵurnalo

第四話：Tombo de korea fraŭlino

第五話：Monumento por la memoro Kotoku Ŝusui

＜ Ĉu guto traboras la monton granitan? ＞香川担当

三好鋭郎さんの人生目標「エスペラントの推進」に、私財を投入してドイツ・フランスでエスペラントの新聞広告を出した話。

（第四日目）12 月 18 日午後 8 時～ 9 時 広島担当

＜閉会式＞＜ Arbo Aogiri kaj Suzuko ＞参加 32 人

忍岡妙子さんの司会で始まった。広島エスペラント会は野原エミさんエスペラント訳の「アオギリと鈴子」の朗読劇。22 歳で被爆し、彼女の左足は切断を余儀なくされた。その後、左足のない鈴子は職場では冷たくあしらわれ差別された日々を過ごす中で、焼け焦げた皮から緑の芽を出しているアオギリに励まされ、力強く生きていくという実話の朗読であった。実話であるがゆえに平和の尊さと核を使った戦争の悲惨さを、エスペラントで世界に発信したいものだと感じさせられた。

Kurantaj Vortoj

ステマ　merkatiko kun aĉetita influanto

不耕起栽培　senpluga kulturo

最強寒波　la plej frida ondo

☆ 楽しい作文教室（139）

塚本猛

①取りあえず行けるところまで行ってみよう。

【訳例１】Provizore, mi iru ĝis la loko, kien mi povos aliri. (Celejo)

【訳例２】Momente ni iru ĝis tie, kien ni povos atingi. (Lumo)

【訳例３】Ni provizore iru kiel eble plej malproksimen. (Drako, ikona)

「取りあえず」は、今のところ、さしあたって、まず第一にという意味なので momente（現在のところ）、provizore（臨時に）や antaŭ ĉio（まず初めに）が使えるでしょう。「～まで」には ĝis（～までの）が考えられます。なお al や ĝis が掛かる語に対格は使わないので注意しましょう。

訳例１は「行けるところ」の部分に aliri（行き着く）を使っていますが、訳例２は困難さのニュアンスを出すためか atingi（たどり着く）を使っています。訳例３はちょっと違っていて「できるだけ遠くに行こう」と表現しています。

②私は河原に降りて川に入ろうとした。

【訳例１】Mi provis malsupreniri al la strando kaj eniri en la riveron. (Celejo)

【訳例２】Mi malsupreniris al riverrando kaj intencis eniri en la riveron. (綴り修正 : Lumo)

【訳例３】Mi volis malsupreniri sur la senakvan riverujon kaj eniri en la riveron. (Ivajo)

「河原」は川辺の平地で水が流れていない所なので strando（岸、砂浜）が考えられます。「降りる」は malsupreniri ien（降りる）が使えるでしょう。sub（下側）は低い方ではなく他の物の下の意味なので suben（下に）は少し違うと思います。

訳例１は「河原に降りて川に入る」という一連の動作を試してみたという表現です。訳例２は最初に「河原に降りて」その次に「川に入ろうとした」という表現です。訳例１は原文と同じで話者が河原にいるかどうかはっきりしませんが、訳例２の場合はたぶん河原に降りているでしょう。

訳例３では「河原」に riverujo（河床）を使い senakva riverujo（水のない河床）と表現しています。voli（～したいと思う）を使っていますので、まだ河原に降りていないかもしれません。

③急に雨が降り始め雨粒が頭や肩にあたる。

【訳例１】Subite ekpluvis kaj pluveroj frapis miajn kapon kaj ŝultrojn. (yosie)

【訳例２】Subite komencis pluvi kaj la pluveroj trafis miajn kapon kaj ŝultrojn. (Drako)

【訳例３】Abrupte ekpluvas kaj la pluveroj malsekigas miajn kapon kaj ŝultrojn. (Ivajo)

「急に」は物事が突然に起こるさまなので subite（突然）や abrupte（不意に）、neatendite（思いがけず）が考えられます。「雨が降り始め」は 接頭辞 ek-（～し始める）が使えるでしょう。

訳例１は ekpluvi（雨が降り始める）を使い、訳例２は komenci pluvi を使っていますが共に無主語文です。「あたる」には frapi（軽く打つ）や trafi（当たる、ぶつかる）、bati（打つ、たたく）などが考えられます。「あたる」を「命中」と考えるためか訳例２のように trafi を使う訳例が多かったのですが、雨粒が当たると痛そうなくらいに激しい夕立の降り始めといった感じでしょうか。

訳例３は malsekigi（ぬらす）を使っています。不意に雨が降り出して雨粒が頭や肩を濡らすという表現です。雨粒で濡れる方に重点を置いています。

④川に入るのは危険かと思った所で目が覚めた。

【訳例１】Kiam mi juĝis, ke eniri en la riveron estas danĝere, mi vekiĝis. (Ivajo)

【訳例２】Mi vekiĝis, kiam mi sentis danĝeron eniri riveron. (Lumo, 組曲)

【訳例３】Mi vekiĝis, kiam mi pensis, ke estas danĝere eniri la riveron. (Drako, 類似訳 : ikona)

「危険」は danĝero（危険）、「目が覚める」は vekiĝi (目が覚める) が使えます。なお原文の「所」に場所の意味は無く状況の意味でしょう。

訳例１は「思う」に juĝi ion（判断する）を使っています。「～かと思う」なので povi esti で可能性を示した訳例もありましたが、この訳例は「危険だと判断した時点で目が覚めた」という表現です。訳例２は主文の「目が覚めた」から始め「思う」に senti ion（感じる）を使っています。夢の中の出来事なので、感覚的に危険を感じた時点で目を覚ましたとの表現でしょう。訳例３は「思う」に pensi ke（～と思う）を使っています。

成績は p.18、新しい課題は p.19

書評

Secesio

Sten Johansson 著、Mondial、2021 年刊、253p

伊藤 俊彦（愛知県）

３枚の写真が本書の表紙を飾っている。一番上は、グスタフ・クリムトの「ベートーヴェン・フリース」。ウィーンにある分離派展示館の壁面を飾る大作である。中央の写真は、労働者向けの巨大な公営住宅カール・マルクス・ホーフ。ウィーンは第一次世界大戦後、社会民主党が長らく政権を握り、「赤いウィーン」と呼ばれていた。その「赤いウィーン」を象徴する建造物である。一番下の写真は、1934 年２月の内乱の際に、兵士たちが集結している光景。場所はオペラ座の前か。これら３枚の写真は、都市ウィーンがたどった歴史、この作品の登場人物たちがそこで過ごした歳月を象徴している。

この物語は、1925 年から 35 年の戦間期ウィーンを舞台として、ルイーゼという女性の一人称の語りにより、彼女が愛する女性ウィリーとの生活を軸に展開してゆく。物語は分離派展示館でのルイーゼとウィリーとの出会いから始まり、その後二人はカフェ・ムゼウムで自己紹介して、たちまち意気投合し、やがて愛し合うようになる。

ルイーゼはウィーン在住の彫刻家であり、ウィリーはデンマーク人で、当時は珍しいフリーのジャーナリストである。この作品では、彼女たちの関係を軸に、ルイーゼの目から見た人びとの行動や世相が精細に描かれている。エゴン・シーレ、ケーテ・コルヴィッツ、カール・クラウス、ジークムント・フロイトなど、著名人も次から次へと登場して、さながら 20 世紀ウィーン文化史という趣がある。

二人の関係は当時、絶対に口外してはならないものであった。ウィリーはジョニーというブルジョアの男性と形式的な結婚をするが、彼はホモセクシュアルである。また、ルイーゼは子どもを持ちたいという思いから、フランツと結婚する。彼は社会民主党員で、ウィーン市役所で住宅行政を担当している。ルイーゼとフランツはカール・マルクス・ホーフに住む。ルイーゼが結婚したことで、彼女とウィリーとの間には、すきま風が吹くようになる。

前半では、二人をめぐるエピソードが語られ、とりわけウィリーの果敢な取材がおもしろい。彼女は居酒屋の従業員やブルジョア家庭の家政婦などになったりして、いわば潜入ルポを敢行し、その記事をデンマークの新聞や雑誌に寄稿するのである。

一方で、政治情勢はどんどん緊迫化しつつあった。ドイツでは 1933 年にヒトラーが政権を掌握し、オーストリアでも反ユダヤ主義や反社会主義の風潮がますます高まりつつあった。ドルフース首相は強権を行使して、社会主義者やドイツとの合邦を唱えるナチスを弾圧する。1934 年２月には内戦が勃発し、武装した労働者の拠点となったカール・マルクス・ホーフは軍の砲火を浴びて、大きな損害を被る。フランツはチェコスロヴァキアに亡命する。７月にはナチスが蜂起し、ドルフースが暗殺される。

そうした状況下で、９月にはウィリーが国外退去を命じられ、長く続いた二人の関係もあっけなく終末を迎えることになる。彼女たちが最後に別れの言葉を交わしたのは、９年前に訪れ、愛し合うきっかけとなった、あのカフェ・ムゼウムである。

この手記は 1935 年に書かれたという設定になっている。ルイーゼはその手記の最後で、未来への希望を記しているが、ユダヤ人であり、レスビアンであり、亡命した社会民主主義者を夫に持つという、二重三重にマイノリティであった彼女に果たして明るい未来は訪れたのだろうか。３年後の 1938 年にオーストリアはナチス・ドイツに併合され、多数のユダヤ人、同性愛者が強制収容所に送られ、虐殺された。作者はルイーゼと幼い息子の未来については何も語ることなく物語を終わらせているが、そのことが彼らのたどった運命を暗示しているようにも思われる。

タイトルの “Secesio” も、芸術上の一潮流にとどまらず、旧来の社会からの離脱、民族や階級などによる分離（それも暴力的な）などを示唆しているように思われる。その意味で、この物語は、ロシアのウクライナ侵略を初めとして世界中でますます暴力が顕在化し、差別が拡大している現在、強いリア

リティをもって読者に訴えかけてくる。

文体は流麗、明快であり、1950 年生まれのスウェーデン人の作者が 1930 年代にウィーンに生きた若い女性の一人称の語りをここまで細やかに描いているのは驚きである。作者によれば、ウィリーはスウェーデンのジャーナリストであったエステル・ブレンダ・ノルドストレーム（1891 ～ 1948）がモデルだとのこと。彼女はレスビアンでもあったが、彼女の伝記的事実がこの物語にどの程度反映されているのかはわからない。

Skize pri nia Esperanto-Movado en 2022

Redakcio

Daŭras la pandemio

La pandemio pro kovimo-19 komenciĝis en la fino de 2019. Nun, komence de 2023, ĝi ankoraŭ daŭras .

En Japanio la nombro de infektitoj ondas kaj kreskas ondo post ondo. Tamen la homoj iel alkutimiĝis al la pandemio. Vakcino, vaste kaj plurfoje disdonita, helpis trankviliĝon de la popolo.

Kompreneble timo pri infektiĝo ĉiam kaj ĉie okupas la penson de la homoj. Ekzemple ni ne vidas homon sen buŝkovrilo en publikaj transportiloj, almenaŭ en Japanio. Zorge vivi sed ne tro timi estas la nuna sinteno ĝenerala en Japanio.

Kongresoj ktp. landaj kaj lokaj

En 2022 plejparto de la kongresoj estis aranĝita rete aŭ hibride.

La 109-a Japana Esperanto-Kongreso, kiu okazis en 23-25 de septembro en la urbo Hatiôzi(Tokio), havis 397 partoprenantojn. Kiel kutime abundis la programeroj: prelegoj, artaj prezentaĵoj kaj fakaj kunsidoj ktp.

La 107-an kongreson oni okazigis hibride, kaj la 108-an nur interrete. Ĉi-foje oni havis ĝin denove hibride. Utiligo de interreto plifaciligis aliĝon de alilandanoj kaj en rezulto oni havis partoprenantojn el 20 landoj.

La 62-a Tohoku-Kongreso de Esperanto okazis en 5-6 novembro en la urbo Yamagata kun 55 partoprenantoj post unujara prokrasto.

La 71-a Esperanto-Kongreso en Regiono Kantoo okazis en 28-29 de majo en la urbo Hatiôzi kun 112 partoprenantoj. Triono el ili partoprenis rete.

La 70-a Kongreso de Esperantistoj en Kansajo okazis en 18-19 de julio kun 159 partoprenantoj en la urbo Ôsaka. Inter abundaj programeroj oni trovis prelegon kaj fakan kunsidon pri Hasegawa Teru, kiu agadis kontraŭ japana militarismo dum la dua mondomilito.

La 94-a Kongreso de Esperantistoj en Kjuŝu okazis en la 27-a de novembro kun 39 aliĝintoj. Ĝi okazis nur interrete per Zoom kaj ses partoprenis el Koreio.

La 21-a Esperanto-Kongreso de Tyûgoku kaj Sikoku okazis de la 27-a de novembro ĝis la 8-a de decembro, po unu horo en ĉiu semajno. Tio estas nova stilo de regiona kongreso.

De la 31-a de decembro 2022 ĝis la 2a de januaro okazis Transjara Kurskunveno de Esperanto-Populariga Asocio kun 62 partoprenantoj en la urbo Kameoka. Oni havis 9 kursojn kaj du el ili havis gvidanton el Koreio.

Agado de diversaj Esperanto-Grupoj

Kompare kun la jaro 2020 kaj 2021 agado de la lokaj grupoj estis pli aktivaj. Regulaj kunvenoj, Zamenhofaj festoj, ekspozicioj okazis en diversaj lokoj.

Protestado kontraŭ milito

En la 24-a de februaro Rusio ekatakis Ukrainion. Japaniaj esperantistoj multe zorgas tion. Jam en marto Japana Esperanto-Instituto kaj Ne-Profitcela Organizo Esperanto Jokohama publikigis protestan deklaron kontraŭ invado de Rusio. Krom ili troviĝas organizoj kaj individuoj, kiuj esprimas kontraŭ la milito. Interalie Hori Jasuo kolektas voĉojn de esperantistoj pri ĝi el diversaj landoj kaj diskonigas ilin per reta mesaĝo.

El "Rakontaro Genĝi", 11-a jarcento

45 La Nimfo de la Ponto – *Fasi Fime* – (13)

源氏物語 第 45 帖 橋姫 はしひめ

eljapanigis belmonto

Laŭ fluo de rakontado okazis ĉe *Nifofu* plia scivolemo kiel ili estas fascinaj, pensante ke ĉi tiu religia seriozulo kia *Kavoru* ne facile havos amsenton al normala virino.

"Do, do, observu ilin pli bone."

Nifofu rekomendis al *Kavoru*, ĉar li estis troa altrangulo en strikta kondutformulo, kaj iritita pro mallibereco.

Kavoru respondis gaje, perceptinte sian intencon plenumita:

"Ne, sensence. Mi havas deziron restigi min nelonge en ĉi tiu vulgara mondo, kaj eĉ bagatela amludo estas evitinda. Se okazos en mi kontraŭvola amsento, mia deziro rompiĝos vane."

Nifofu ridis kontraŭ lia parolo:

"Ho, tro ŝvela parolo! Singravigaj vortoj de religiulo kiel kutime. Mi volas konfirmi ĝian konkludon."

Kavoru estis scivolema en la koro pri la testamento aludita de la maljunulino, pro kio li ne atentis pri aliaj aferoj - interesaĵoj kaj la belaj princinoj.

16. la Princo petas kuratoron de *Kavoru*

Venis la luna oktobro. *Kavoru* vizitis *Udi* en la kvina aŭ sesa tago.

"Bonvolu spekti la faman fiŝkaptan scenon de la riverbarilo de *Udi* en ĉi tiu sezono."

Oni rekomendis al li, sed li nuligis tiun planon, dirante:

"Kial mi iros al la barilo kontraŭ plekogloso por konkuri la vivolongecon kun mirmeleono*?"

Kaj li eliris tre inkongnite.

Li surĉariĝis sur la bambuplektita simpla bovĉaro** kun facila koro, kaj aŭdace vestis sin

はてはては、まめだちていとねたく、おぼろけの人に心移るまじき人のかく深く思へるを、おろかならじとゆかしう思すこと限りなくなりたまひぬ。

「なほ、またまた、よくけしき見たまへ」

と、人をすすめたまひて、限りある御身のほどのよだけさを、厭はしきまで心もとなしと思したれば、をかしくて、

「いでや、よしなくぞはべる。しばし世の中に心とどめじと思うたまふるやうある身にて、なほざりごともつつましうはべるを、心ながらかなはぬ心つきそめなば、おほきに思ひに違（たが）ふべき事なむはべるべき」

と聞こえたまへば、

「いで、あなことごとし。例のおどろおどろしき聖詞（ひじりことば）見はててしがな」

とて笑ひたまふ。心の中（うち）には、かの古人（ふるびと）のほのめかしし筋などの、いとどうちおどろかされてものあはれなるに、をかしと見ることも、めやすしと聞くあたりも、何ばかり心にもとまらざりけり。

16

十月になりて、五六日のほどに宇治へ参うでたまふ。

「網代（あじろ）をこそ、このごろは御覧ぜめ」

と聞こゆる人々あれど、

「何か、その蜉蝣（ひをむし）にあらそふ心にて、網代にも寄らむ」

と、そぎ棄てたまひて、例の、いと忍びやかにて出で立ちたまふ。

かろらかに網代車にて、縑（かとり）の直衣（なほし）指貫（さしぬき）縫はせて、ことさらび着たまへり。

per noŝo-vesto sen desegnaĵoj kaj saŝinuko***, intence tiel kudrigitaj.

La Oka Princo atendis lin kaj ĝojis, kaj faris laŭlokan festenon tre pompe. Post la vespera mallumiĝo li proksimigis al si olelumigilon kaj faris interpreton de la sutroj, kiujn li dumtempe ĉesis legi ĉe interesigaj tekstoj, kune kun la *aĉarjo* invitita de la templo malsupren. Tute sendorme pasis tempo, dume tre furiozis rivera vento, disĵetiĝis arbofolioj kaj tondradis sono de akvo. Tio superis la fascinecon kaj la loko estis ĉirkaŭpremita de soleca teruro.

Ĉikraŭ horo de la matena lumiĝo baldaŭ, la *Tiŭĵaŭo Kavoru* rememoris la lastan krepuskon nature kaj elpensis parolkomencon, ke la sono de muzikilo estis alloga.

"Kiam mi vagis en la krepuska nebulo de la lasta vizito, mi ekaŭdis fascinan muzikludon nur pece. Tiu emocio ankoraŭ restas en mi, kaj mi deziras plu aŭskulti kvazaŭ malsate."

Al lia parolo diris la Princo:

"Mi jam forlasis ĉion, interesaĵon kaj allogaĵon, tial forgesis ĉion lernintan."

Sed li ordonis al subulo alporti la sepkordan kotoon.

"Mi timas mian ludon mallerta. Se alia muzikilo gvidos min, mi probable rememoros kiel ludi."

Li ankaŭ alportigis bivon, kaj rekomendis ludi ĝin al la gasto. *Kavoru* prenis ĝin kaj ekludis.

"Mi estas certa, ke ĉi tiu ne lanĉas la saman sonon kiun mi momente aŭskultis tiam. Mi kredis, ke tion elirigis la bona muzikilo."

Kaj li ne ludis kun hezitemo.

"Ho, frapego sur min. De kie transvenas instruo de ludtekniko por kapti orelojn al ĉi tiu montovilaĝo? Ne kredebla kulpigo!"

(daŭrigota)

宮待ちよろこびたまひて、所につけたる御饗（あるじ）など、をかしうしなしたまふ。暮れぬれば、大殿油（おほとなぶら）近くて、さきざき見さしたまへる文どもの深きなど、阿闍梨（あざり）も請（さう）じおろして、義（ぎ）など言はせたまふ。うちもまどろまず、川風のいと荒ましきに、木の葉の散りかふ音（おと）、水の響きなど、あはれも過ぎて、もの恐ろしく心細き所のさまなり。

明け方近くなりぬらんと思ふほどに、ありししののめ思ひ出でられて、琴（こと）の音（ね）のあはれなることのついでつくり出でて、

「前（さき）のたび霧にまどはされはべりし曙（あけぼの）に、いとめづらしき物の音（ね）、一声うけたまはりし残りなむ、なかなかにいといぶかしう、飽かず思うたまへらるる」

など聞こえたまふ。

「色をも香（か）をも思ひ棄ててし後、昔聞きしこともみな忘れてなむ」

とのたまへど、人召して琴（きん）とりよせて、

「いとつきなくなりにたりや。しるべする物の音（ね）につけてなん、思ひ出でらるべかりける」

とて、琵琶召して、客人（まらうと）にそそのかしたまふ。取りて調べたまふ。

「さらに、ほのかに聞きはべりし同じものとも、思うたまへられざりけり。御琴（こと）の響きからにやとこそ思うたまへしか」

とて、心とけても掻きたてたまはず。

「いで、あなさがなや。しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかここまでは伝はり来（こ）む。あるまじき御ことなり」

（続く）

*Originallingve: *fiwo* = plekogloso, kaj *fiwomusi* = mirmeleono.

**Vortoludo. Originallingve: fiŝkapta barilo estas "aziro" , kaj la ĉaro de ĉi tiu speco estas nomata "aziro-guruma" (aziro-ĉaro).

***saŝinuko = hakamo, vasta loza pantalono.

Kajero
Libervola

Mi faras miraklan saŭcon majonezon

Tadaŝi JAMADA (Aiĉi)

国際青年エスペラント大会での茶席でマヨネーズの作り方が話題になり、家でマヨネーズの自作にトライしてみることにしました。材料は卵、酢、塩、それに油だけ。おすすめです。

"Faru same kiel fari majonezon". Dommastrinoj akre diris al viro, kiu provizore ŝaŭmigis teon. Kiam okazis en la urbo Oocu 大津 la Internacia Junulara Kongreso (1965), la kongresanoj parte estis invititaj al la teceremonio, kiu estis preparita en la salono de budhana preĝejo. Kiam finiĝis la serioza kaj silenta ceremonio, la gastiganto proponis al gastoj ekkoni ŝaŭmigon de teo en taso. Scivolema viro tuj prenis ŝaŭmigilon el bambuo 茶筅 kaj la tason, li ekkomencis fari malfacilan delikatan manlaboron laŭ la gvido. Virinoj rigardis kun intereso kaj diris: "Jen tiel, kiel fari majonezon!" Mi vidis ŝin, eŭropan dommastrinon, kiu hejme strebadas fari majonezon en bovlo.

Kiam mia juna edzino estis lernantino de kuirado, bongustaj nekonataj saŭco, supo kaj aliaj bongustaĵoj aperis sur nian tablon. Lerninte majonezon, ŝi praktikis hejme fari la saŭcon kun ovo, vinagro kaj oleo. Elpreninte ovoflavon el freŝa ovo ŝi ŝaŭmigis per ŝaŭmigilo por kombini ovon, vinagron kaj oleon. Iam ĝi restis likva, emulsia rompite, kvankam ŝia brako ne estis laca, aŭ alian fojon ĝi fariĝis emulsia stabile. Fuŝe kaj sukcese. Mustardo, salo, acido kaj aliaj helpas guston plibonigi.

Kielmaniere vi faras majonezon? Memfarita majonezo estas pli bona ol la aĉetita. Ĝi estas plisaniga, ĉar ĝi ne enhavas konservaĵojn. Nun mi mem staras en la kuirejo. Mi havas novan man-ŝaŭmigilon kaj malgrandan plastikan vazon, en kiu oportune la maŝino ŝaŭmigas.

Majonezo estas emulsia saŭco, ĝi estas farita je fantazia maniero. Unu granda ovoflavo tenas unu plenan tason da majonezo. Ni diru ke tio estas magio aŭ arto de kuirado. Ni bezonas: Ovon — 1; vinagron aŭ citronon — 1 kuleron, salon — 5 gramojn; vegetalan oleon — 250 mililitrojn.

Mi uzas vinagron de rizo kaj rizoleon. Kaj por ke mi ne fuŝu, mi malfermas ne unu, sed du ovojn kaj aldonas vinagron en la kruĉon. Enmetinte la maŝinon en la kruĉon momenton ŝaltu, kaj iomete da oleo malrapide verŝu kaj baldaŭ la miksaĵo iĝas ŝaŭma kaj emulsia.

Recepto de interreto diras: laŭ via volo vi povas aldoni herbojn kaj spicojn al la saŭco. Kun la helpo de aldonaĵoj, vi ricevos alian saŭcon diferencan laŭ gusto kaj aromo. La acido helpas al stabiligi la emulsion per helpo de ovoflavo sorbi pli da graso, kio signifas, ke multe pli facile fari la majonezon. Vi vidas, ke la oleo estas sorbita de ovo, do aldonu etajn gutojn da oleo. Nun estas komenco de emulsio. Vi povas aldoni la oleon iom pli rapide. Sed ne tro rapide.

Gratulojn! Jen emulsio fantazia mirakla glata krema: via propra majonezo. Majonezo tiel konservas sian guston dum ĉirkaŭ unu semajno en fridujo. Mi devas konsumi la saŭcon en fridujo por ke mi faru kaj studu pli kreman, pli bongustan. Ĉiutage mi manĝas kaj mi devas kontroli mian pezon kaj iri sur la pesilo. Fari majonezon estas stabiligi emulsion el akvo kaj oleo. Oleo estas ne akvo sed likvo, kiu estas olesolvebla, en akvo ĝi ne solviĝas.

川崎市の花・つつじ
Azaleo, la urba floro de Kawasaki

La 110-a Japana Esperanto-Kongreso

La 21-a, 22-a de oktobro 2023

第 110 回 日本エスペラント大会

日時： 2023 年 10 月 21 日（土）、22 日（日）

拠点会場： **川崎市総合自治会館**（JR・東急 武蔵小杉駅下車徒歩 2～10 分）
川崎市中原区小杉 3 丁目 600 コスギ サード アヴェニュー4階

主催： 一般財団法人 日本エスペラント協会　　**協力：** 川崎エスペラント会

後援： 川崎市、＜以下申請予定＞川崎市教育委員会、（独）国際交流基金、
日本ユネスコ国内委員会、（公法）日本ユネスコ協会連盟、（一社）日本ペンクラブ、
（公財）川崎市国際交流協会、（一社）日本外国語教育推進機構（JACTFL）

大会テーマ： **Kion ‹Esperanto› nun revas por la mondo?**

〈エスペラント〉がいま夢見る世界は何か

コロナ禍のもとエスペラント界でも進行したデジタル化を有効に利用して、第 110 回日本エスペラント大会は史上かつてない試みに挑戦します。拠点会場を神奈川県川崎市に置きつつ、日本全国の複数地域のみなさんに小規模な集会を並行して開いていただき、それぞれの会場をオンラインで相互につなぎます。そして、各会場でプログラムを共同して視聴したり、各会場からプログラムの一部を発信したりしてみようというのです。実現のためにはまだ多くの調整や準備の作業が必要ですが、日本エスペラント大会は、川崎から新しい歴史の一歩を踏み出そうとしています。

あわせて、1990 年代半ばから 30 年近くにわたって通例となってきた 3 日間の会期を 2 日間に短縮します。しかし、オンラインでプレ企画を実施して、会期の短縮を十分以上に補います。コンパクトながら、密度も質もこれまでになく高い内容の大会を目指します。

そのためにも内容の濃い大会テーマを選定しました。「〈エスペラント〉がいま夢見る世界は何か」です。

最近、エスペラントを話す AI（人工知能）が登場し、話題となっています。自動翻訳や音声通訳の技術も日進月歩の勢いです。ことばの壁は、技術進歩がいずれ取り去ってくれるのでしょうか？　そんな未来を予感させるいま、エスペラントの存在意義とは？　わたしたちエスペランティストは、このことばにどんな希望を託せるのでしょうか？　これが、大会テーマの背景にある切実な問題意識です。

実は、ある意味、大会はもう始まっています。プレ企画第 1 弾として、大会テーマをめぐる連続学習討論会がすでにスタートしているからです（連続学習討論会の詳細については RO 誌各号の「日本エスペラント大会だより」や大会ウェブページを参照）。

新しい歴史の一歩を踏み出す日本エスペラント大会に、あなたも参加、いえ、参画しませんか？

第 110 回日本エスペラント大会実行委員会

110回B5movado用.indd 1　2023/01/12 0:19

〔大会番組について〕

▼番組企画案募集

「日本大会でこんなことをやってみたい」「こんなことをやってほしい」という企画案を募ります。新しく生まれ変わろうとする日本大会にはみなさんのお知恵がぜひとも必要です。いただいた企画案は大会実行委員会が採否を決定します。採用の場合、発案者ご自身に企画実現のためご協力をお願いする可能性があります。不採用の場合でも、今後の大会プログラム立案の参考とさせていただきます。応募のしかたについては、大会ウェブページをご覧ください。

▼「オンライン文化祭」出演募集（事前申し込み必要・無料）

エスペラント会の仲間が共同して作った地元紹介の動画や、個人で研究した成果などを番組として発表できる「オンライン文化祭」を開催します。歌や手品などのパフォーマンスでもOK。お住まいの場所から大会に積極的に参画しましょう。大会ウェブページからお申し込みください。

▼分科会・交流ブース募集（事前申し込み必要・有料）

詳細は大会ウェブページに掲載予定です。料金をお支払いのうえ、申し込み用紙をお送りください。

（分科会） エスペラントに関わる、またはエスペラントを使ったグループ活動の番組で、大会参加者が自由に参加できます。川崎会場の会議室で開催するほか、それ以外の会場からオンラインで開催することもできます。

（交流ブース） 川崎会場内のスペースでテーブルを貸し出します。活動紹介等にお使いください。

〔武蔵小杉駅（川崎会場最寄り駅）へのアクセス〕

東京駅からJR横須賀線で約20分／新宿駅からJR湘南新宿ラインで約20分
品川駅からJR横須賀線で約10分／池袋駅から地下鉄副都心線・東急東横線で25～28分
新横浜駅から東急新横浜線(2023年3月開通)で約15分／川崎駅からJR南武線で9～12分
横浜駅から東急東横線(急行)で15分、JR横須賀線で12分
成田空港駅から成田エクスプレスで約80分／羽田空港からリムジンバスで約60分

〔川崎会場周辺の宿泊について〕

（武蔵小杉駅）リッチモンドホテル、スーパーホテルPremier武蔵小杉駅前、ホテル精養軒、フレックスステイイン多摩川、川崎グリーンプラザホテル
（JR南武線武蔵中原駅）東横イン武蔵中原駅前（武蔵小杉から1駅）
（東急元住吉駅）川崎市国際交流センターホテル（会場から1.3km、武蔵小杉から1駅）
など。各自ご都合のよいホテルをご予約ください。

〔連絡先〕 日本エスペラント大会事務局

162-0042 東京都新宿区早稲田 12-3 一般財団法人日本エスペラント協会内
TEL：03-3203-4581 FAX：03-3203-4582
大会ウェブページ（日本語）：https://jek.jei.or.jp/ja/ →
（お問い合わせ・各種申し込みには、ウェブページ内のフォームが利用できます。）

110回B5movado用.indd 2 2023/01/12 0:19

◆大会参加費など

（単位は円）

大会参加費		7月末	8月～	備　考	
A1	大人（基本）	4,000	5,000	人数制限あり	
A2	大人（オンライン限定）	2,000	3,000	川崎会場への入場不可	
A3	大人（不在参加）	2,000	3,000	大会冊子等にお名前を記載	
B1	障がい者	2,000	3,000		
B2	青年（25～34歳）	2,000	3,000	1988/4/2～1998/4/1生まれ	「青年」「青少年」該当者は、生年月日をお知らせください。
B3	青年（18～24歳）	1,000		1998/4/2～2005/4/1生まれ	
B4	来日旅行者	1,000			
C1	青少年（17歳以下）	無料		2005/4/2以降生まれ	
C2	海外から（オンライン限定）	無料			
C3	地域市民（川崎会場限定）	無料			

＜募集企画＞　分科会開催［川崎会場］3,000／［オンライン］1,000（6 月末まで）
交流ブース出店　　2,000（8 月末まで）

※申し込み締め切りは **10月7日（土）** です。

※上記の大会参加費は、主催者の責に帰すべき事由による開催中止の場合を除き、原則として払い戻しはいたしません。オプション費用は、9月末までに限り、返金手数料500円を控除し返金します。

※A2・A3で申し込み済みの方が、その後、川崎会場での参加を希望される場合、事務局までお問い合わせください。（申し込み締め切り前で、人数枠に余裕があれば、A1の参加費との差額2,000円のお支払いで変更が可能です。）

※今回の大会では、大会記念品は用意しておりません。

※大会当日、川崎会場内でJEI学力検定試験を実施します。
筆記試験：21日（土）、会話試験：22日（日）または別途オンラインで
検定試験の詳細は、日本エスペラント協会のウェブページをご覧ください。受験料は大会参加費と一緒に振り込むこともできます。（大会に参加せず検定試験のみの受験も可）
（受験料：1級 6,000円，　2級 4,500円，　3級 3,000円，　4級 1,500円）

◆申し込み方法

参加費ほかを下記の口座にお支払いください。

※お支払い金額の内訳、ローマ字のお名前、連絡先をかならずお知らせください。

ゆうちょ銀行振替口座 郵便振替 00130-4-744162 日本エスペラント大会A

［ゆうちょ銀行以外の金融機関から送金する場合］

ゆうちょ銀行 〇一九支店 当座 744162 日本エスペラント大会A

入金確認後、1～3週間のあいだに、メールで（メールアドレスのない方のみハガキで）申込確認書（Konfirmilo）をお送りします。

110回B5movado用.indd 3　2023/01/12 0:19

La 110-a Japana Esperanto-Kongreso

Dato: la 21-a, 22-a de oktobro 2023

Ĉefa Kongresejo: Kawasaki-shi Sogo Jichi-kaikan
en Urbo Kawasaki, Gubernio Kanagawa

Kongresa Temo: ***"Kion ‹Esperanto› nun revas por la mondo?"***

La 110-a Japana Esperanto-Kongreso okazos en originala formo: krom sia ĉefa kongresejo en Kawasaki, urbego situanta inter Tokio kaj Jokohamo, ĝi havos plurajn kongresejetojn dise tra la lando, kiuj estos rete ligitaj inter si kaj kun la ĉefkongresejo; la programeroj okazos jen tie kaj jen alie, sed la kongresanoj povos rete partopreni multajn el ili, estante eĉ en sia hejmo.

Anstataŭ jam kutima tri-taga kongreso ni havos kompaktan du-tagan kongreson. Ni tamen kompensos la perditan tempon pli ol sufiĉe per retaj antaŭkongresaj eventoj. Jen alia unikaĵo de la 110-a JEK.

Unu el la antaŭkongresaj eventoj fakte jam komenciĝis en januaro. Temas serio de rondtabla diskuto pri la kongresa temo: "Kion ‹Esperanto› nun revas por la mondo?".

Lastatempe ni informiĝis pri artefarita intelekto, kiu "parolas" Esperanton. La teknologio pri maŝintradukado kaj aŭtomata interpretado plu progresas. Ĉu la lingvaj baroj de mil jaroj eble dissaltos en proksima estonteco? Do, kian ekzistokialon tiam havos nia lingvo de espero? Jen brule prema demando.

Vi certe vidas, ke la 110-a JEK estos plursence epokfara. Ĉu ne indas, ke vi kontribuu al ĝia sukceso?

Programeroj : Nun ni planas prelegojn, fakajn kunsidojn ktp. Ni publikigos novajn informojn je la retejo "https://jek.jei.or.jp/" .

Kotizoj: Vojaĝanto al Japanio el eksterlando 1 000 enoj
Reta partopreno el eksterlando senpage
Loĝanto plenaĝula en Japanio
surloka: 4 000 enoj / reta: 2 000 enoj (ĝis la fino de julio 2023)
surloka: 5 000 enoj / reta: 3 000 enoj (depost la komenco de aŭgusto 2023)
Pri ceteraj kotizoj (handikapulo, junulo, ktp) demandu al Japana Esperanto-Instituto (vidu informon malsupran piednotan).

Limdato de aliĝo: la 7-a de oktobro 2023

Pri detaloj havu kontakton kun Japana Esperanto-Instituto
/ JP-162-0042 Tôkyô-to Sinzyuku-ku Waseda-mati 12-3
telefono: +81-3-3203-4581, retejo: https://jek.jei.or.jp/
*Vi povas sendi mesaĝojn per demando-formularo en la retejo.

110回B5movado用.indd 4 2023/01/12 0:19

Sonĝoj dum Dek Noktoj (3)

NATUME Sôseki, trad. OKI Keimei

La dua nokto

Mi havis ĉi tian sonĝon:

Kiam mi revenis al mia ĉambro laŭ koridoro post retiriĝo el la ĉambro de budhana pastro, la lampo, "andono"[1], malforte lumis en la ĉambro. Mi sidiĝis genue sur kusenon sed kun unu genuo levita, kaj iom suprentiris la meĉon de la lampo. Tiam ties elbruligita parto, simila al floro de kariofilo, falis sur la vermiljone lakitan bazon de la lampo, kaj samtempe la ĉambro subite lumiĝis.

La bildo sur la glitpordo, "husumo"[2], estis desegnita de Buson[3]. En la bildo nigraj salikoj estis perspektive desegnitaj kun malhela koloro por proksimaj salikoj kaj kun hela koloro por malproksimaj salikoj, kaj plie estis desegnita malvarmaspekta fiŝisto oblikve portanta pajlan ĉapelon sur la kapo kaj pasanta sur digo. La statuo de Manĵusrio[4] aperinta el maro estis pentrita sur pend-pentrorulaĵo, kiu pendis sur la muro de tokonomo[5]. Odoro de elbruligita incenso ankoraŭ ŝvebis en malluma spaco en la ĉambro. Estis tre kviete kaj nenia homa moviĝo estis sensebla, ĉar estis granda templo. Ronda ombro, kiun faris ronda andono, sur la plafono aspektis kvazaŭ vivaĵo, kiam mi ĵetis mian rigardon supren al ĝi.

Tenanta min sidanta kun la genuo levita, per maldekstra mano mi turnis parton de la kuseno kaj ŝovis la dekstran manon sub ĝin por palpi glaveton. Ĝi certe troviĝis, kiel mi supozis. Ĉar la kialo estis ke ekzisto de la glaveto trankviligas min. Mi ree turnis la renversitan parton al antaŭa formo kaj firme sidiĝis sur ĝin.

La budhana pastro diris: "Vi estas samurajo. Vi ne povas ne ekposedi la klerecon 'Satori'[6], mi kredas, ĉar vi estas samurajo. Jam pasis longa tempo, sed vi ankoraŭ ne povas havi tiun klerecon. Mi konvinkiĝis, ke vi ne estas

夢十夜 (3)

夏目 漱石

第二夜

こんな夢を見た。

和尚(おしょう)の室を退(さ)がって、廊下伝(ろうかづた)いに自分の部屋へ帰ると行灯(あんどう)がぼんやり点(とも)っている。片膝(かたひざ)を座蒲団(ざぶとん)の上に突いて、灯心を掻(か)き立てたとき、花のような丁子(ちょうじ)がぱたりと朱塗の台に落ちた。同時に部屋がぱっと明かるくなった。

襖(ふすま)の画(え)は蕪村(ぶそん)の筆である。黒い柳を濃く薄く、遠近(おちこち)とかいて、寒(さ)むそうな漁夫が笠(かさ)を傾(かたぶ)けて土手の上を通る。床(とこ)には海中文殊(かいちゅうもんじゅ)の軸(じく)が懸(かか)っている。焚(た)き残した線香が暗い方でいまだに臭(にお)っている。広い寺だから森閑(しんかん)として、人気(ひとけ)がない。黒い天井(てんじょう)に差す丸行灯(まるあんどう)の丸い影が、仰向(あおむ)く途端(とたん)に生きてるように見えた。

立膝(たてひざ)をしたまま、左の手で座蒲団(ざぶとん)を捲(めく)って、右を差し込んで見ると、思った所に、ちゃんとあった。あれば安心だから、蒲団をもとのごとく直(なお)して、その上にどっかり坐(すわ)った。

お前は侍(さむらい)である。侍なら悟れぬはずはなかろうと和尚(おしょう)が云った。そういつまでも悟れぬところをもって見ると、御前は侍ではあるまいと言った。人間の屑(くず)じゃと言った。ははあ怒ったなと云って笑った。口惜(くや)しければ悟っ

samurajo. Vi estas sentaŭga homrubaĵo." Plie, li diris ke mi ja koleris, kaj ridis. Fine, li diris ke mi montru al li la ateston pri posedo de la klereco, kaj turnis sian kapon flanken. Maldece!

Mi decidis: "Mi certe plenumos la taskon ekposedi la klerecon ĝis tiam, kiam la tablohorloĝo, metita en la tokonomo en la najbara ĉambrego, batos gongeton je la sekvanta horo; post la posedo de la klereco mi eniros en lian ĉambron ĉi-vespere kaj prenos lian vivon kontraŭ la posedo de la klereco; se mi ne povos havigi tion al mi, mi ne povos rabi la vivon de la budhana pastro; tial mi nepre havigu al mi la klerecon, ĉar mi estas samurajo."

"Se mi ne povos havi tion, mi mortigos min per glavo. Samurajo, kiu estas malhonorita, ne povas plu vivi. Mi kun nenia bedaŭro mortigu min !"

Kiam mi pensis tiel, mia mano senkonscie reetendiĝis sub la kusenon kaj elprenis la glaveton eningitan en vermiljonan glavetingon. Mi firme tenis la tenilon de la glaveto per unu mano kaj per la alia mano elingigis ĝin per la movo de la ingo antaŭen. Ties malvarma klingo tuj brilis en la malluma ĉambro. Mi sentis ke teruraĵoj unu post alia kvazaŭ siblante forkuras de la tenilo.

(daŭrigota)

た証拠を持って来いと云ってぷいと向(むこう)をむいた。怪(け)しからん。

隣の広間の床に据(す)えてある置時計が次の刻(とき)を打つまでには、きっと悟って見せる。悟った上で、今夜また入室(にゅうしつ)する。そうして和尚の首と悟りと引替(ひきかえ)にしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければならない。自分は侍である。

もし悟れなければ自刃(じしん)する。侍が辱(はずか)しめられて、生きている訳には行かない。綺麗(きれい)に死んでしまう。

こう考えた時、自分の手はまた思わず布団(ふとん)の下へ這入(はい)った。そうして朱鞘(しゅざや)の短刀を引(ひ)き摺(ず)り出した。ぐっと束(つか)を握って、赤い鞘を向へ払ったら、冷たい刃(は)が一度に暗い部屋で光った。凄(すご)いものが手元から、すうすうと逃げて行くように思われる。

(続く)

Rimarkoj (La dua nokto):

1) la lampo, "andono" (andon, 行燈): Ĝi estas lampo kun papera lampŝirmilo sur la flankaj partoj de la lampo kaj starigita sur planko. En la interno meĉo, kiu sorbis oleon, brulas por lumigi ĉambron.
2) la glitpordo "husumo" (husuma, 襖): Ĝenerale ĝi estas uzata kiel dividilo de du-ĉambroj kaj konsistas el du aŭ kvar paperaj/tolaj ekranoj kun lignaj kadroj. Oni povas malfermi ĝin glitigante ekranojn laŭ gravulitaj reloj de ligno por ke oni povu uzi la dividitajn ĉambrojn kiel unu ĉambron.
3) Buson (蕪村): YOSA Buson (JOSA Buson, 与謝蕪村) naskiĝis en la jaro 1716 kaj mortis en la jaro 1784. Li estas hajkisto kaj pentristo.
4) La statuo de Manĵusrio: Manĵusrio (文殊菩薩) estas unu el bodisatvoj de budhismo.
5) tokonomo: La spaco por dekoraciaĵo en la ĉambro.
6) havi la animstaton "Satori": Scii aŭ kompreni aŭ rimarki veran sencon de afero. La vorto "Satori" estas budhisma vorto kaj signifas, ke forpeli tian penson ke la praktikanto erare kredas aferon kiel veran kaj ne scias verecon de afero, nuligi embarason, kaj posedi la kapablon kompreni universalan verecon.

西尾 務さん追悼

永遠の西尾務さん

桜井 大二郎（東京都）

西尾さんは、エスペラントの語学学習と周辺文化・活動を私ら後進に伝えてくれました。

特にインパクトの大きかったのがメンバー一人ひとり別々のエスペランチスト訪問旅行です。1973年阪大エスペラント会に入会して間なしに提示された目標で、私はすぐに飛びつき、準備して、翌年の春休みに一か月間実施。そうとなれば否応なくエスペラントが話せるようにならざるを得ません。学習に火が付きます。訪問できる親しいエスペランチストの関係作りも必須です。そこで関西エスペラント連盟の国際部を仕切っていた西尾さんから文通相手の選択肢をいただくことまでお世話になりました。でもただ行ったらいいの？ということで日本の身の回りの生活文化紹介が良かろうとなり、いろいろ写真を撮ってスライド作成、説明文を準備しました。訪問先はほぼ東欧のお家でホテル泊まりは３日間だけでした。それぞれで生活に受け入れてもらい、学生寮でわいわいの一晩もありました。一生涯の宝となる経験でしたし、帰ってからも交流が続きました。他の５人のメンバーでもそれぞれの経験があり、すごい影響力のある企画だったなぁと西尾さんに感謝です。

他には、林間学校、市民ロンドや大学交流合宿、焼津での全国合宿などひとくくりで言うとエスペラント合宿です。お膳立てをしてもらったり、運営の手ほどきを受けたりして、エスペラント活動の要を西尾さんから学びました。

1977年正月、小西岳さん宅で。後列左が西尾さん

いま思うに、寝食といった生活と絡めた語学学習が最も効果があり、かつ長続きするのではないかと。40年のブランクを経てもエスペラントが思い出せるのはこういった「生活学習」を西尾さんから伝授されたお陰だろうと思います。

イベント以外、学生時代の日常生活ではいつも西尾さんの存在があり、下宿の行き来、風呂屋、料理、バイク……これからもずっと僕の中で一緒にいてくれます。

学生時代から仲間の先頭に

三輪 博昭（神奈川県）’

西尾務さんとは大阪大学のエスペラント会で知り合いました。大学時代は西尾さんだけでなく、同エス会の親しい仲間が大学近くに下宿していたので、一緒に時間を過ごすことが多く、皆でエスペラントに関する様々な活動をしていました。

学生時代の活動では、関西学生エスペランティスト連盟（KLES）という組織があって、関西の大学約10校が加盟していました。そこでは春の新入生歓迎合同合宿、他大学エス会へ指導者派遣、秋の学園祭の応援などの行事があり、その中で西尾さんはリーダーシップを発揮して熱心に活動していました。

また、ふだんから皆で集まれる場所（事務所）を作ろうと彼が言い出し、大阪市桜ノ宮駅近くのアパートの一室を借りました。KLESメンバーが定期的に集まって、勉強会、イベントの企画相談、いろいろな意見交換や議論などをし、同時に親交を深めたりしていました。

また西尾さんの発案で、学生時代にエスペラントを使ったヨーロッパ旅行をしようということになり、私を含めて希望者６人が集まりました。一か月以上の長期旅行です。各自が行きたい国を自由に決めて、現地では全員が単独行動をとることにしました。行きたい国や都市に住むエスペランティストを探して文通を始め、訪問の希望を伝えます。そして数日間ずつ各地を回る滞在スケジュールを伝えて宿泊場所の紹介依頼、現地エスペラント集会への参加などをお願いしました。また現地kunvenoで日本の紹介をしようと、多くのスライドや写真などを

（西尾務さんのフェイスブックより）

準備しました。広島での原爆被害を記したエス本も配布用に用意しました。その結果、旅先で各地のエスペランティストに大変歓迎されたのです。国や民族が違っても同じ人と人との交流に変わりはないと実感しました。この旅行の企画から実行まで準備に 1 年近くかかったのですが、この間西尾さんの強い意志と支えがあって皆が励まされ、実行までたどり着くことができたのです。私と同年配である西尾務さんに心からの感謝の気持ちを伝えたい。Elkoran Dankon al Tomĉjo !

「ダイナミックレイク琵琶湖から世界へ」の翻訳出版

大西 真一（滋賀県）

近江エスペラント会が第 103 回日本エスペラント大会を滋賀の地で開催することを決めたのは、2015 年 4 月であった。西尾さんは 2008 年に彦根に転居されてはいたが、そのときはまだ近江エスペラント会の会員ではなかった。しかしその直後の 5 月に入会されている。そして、6 月の実行委員会発足時から、中心人物として活動した。大会記念品の選定は、なかなか決まらなかったが、西尾さんが琵琶湖に関する図書を数冊購入して候補として選定した。その中で、一番の候補があったのだが、翻訳許可が得られず、第 2 候補であった表題図書の翻訳出版が決まった。

原本の著者と私大西の元勤務会社が同じであったことも幸いして、翻訳出版に関する話は、順調に進行した。西尾さんと私は、原本の著者とともに出版社に何回も足を運んだ。一方、西尾さんはプロジェクトリーダーとして、早い段階で世界エスペラント協会の機関誌 Esperanto に、この翻訳出版についての記事を投稿して、当時は今ほど一般化していなかった SDGs 活動の一環であることを説明・宣伝した。翻訳作業は西尾さんを中心に複数人が分担した。西尾さんが苦労されたのは、単語表記の統一、固有名詞の表記、特に中国の地名表記などではなかったかと思う。そんな中で、発行部数の問題は、定価とともに大会主催者である日本エスペラント協会との間で、調整が難航した。西尾さんは、販路は世界が対象であるとの考えから、大会会計を主とする JEI の考えには、容易には同意しなかった。第 1 次翻訳作業が終わる 2016 年春に、西尾さんが体調不良のため活動困難となり、プロジェクトの主担当を降りることとなった。もし西尾さんが活動を継続できていたら、このプロジェクトの終わりは、違った形になっていたかもしれない。

新しいことに挑戦し続けた西尾務さんを悼む

中道 民広（兵庫県）

西尾務さんと初めて会ったのは , もう 50 年以上も前のことで、もう忘れてしまっていたり、間違って思い込んでいることもあると思うが、「関西エスペラント連盟 65 年史」や “La Movado” のバックナンバーで確認しながら、彼の挑戦人生をたどってみたい。

学生時代彼とは同じ大学でエスペラント研究会に所属していたが、私が卒業した年に彼が入学したので、大学ではすれ違い、一緒に仕事をしたのは KLEG の活動の中であった。学生時代の活動については、同時期に活動していた三輪博昭さんや桜井大二郎さんの弔辞をお読み頂きたい。

コピー機の導入

関西エスペラント連盟（以下 KLEG）は、1987 年事務所にコピー機を導入した。当時湿式コピー機か乾式か大いに議論になった（ 当時は私の職場でも、各課にあるのは湿式で、乾式コピーを使うときは課長の承認が必要だった）。執行委員会（ 現理事会）では経費を考えて湿式を購入すると決定して委員会に臨んだが、若手の委員から強い反対が起こり、乾式に覆ってしまった。この時西尾さんは執行委員会では湿式に、委員会では乾式に賛成したため、執行委員会の中で大いにもめた。しかし、その後は乾式が当たり前になり、彼に先見の明があったことになる。

事務局長就任と事務所の改造

1996 年 5 月 KLEG 事務局長の （p.17 下段へ）

京都で入門講座

京都エスペラント会は次のとおり入門講座を行う。

日時：2023 年 4 月 15 日～ 5 月 27 日
　　毎週土曜日 午前 10 時～ 12 時
会場：貸会議室エスペラント会館
　　交通：地下鉄五条駅から西へ 500m
　　市バス 50 系統でバス停「五条西洞院」下車
費用：3000 円（受講料 7 回分＋テキスト）
　　学生 1500 円
　　※初回だけの参加は無料
教材：ドリル式エスペラント入門
申込み：メール：esperanto_kioto@yahoo.co.jp
　　電話：075-343-3120 エスペラント会館

［←森川 和徳］

奈良エスペラント会学習会で長谷川テル

1 月 18 日（日）西部公民館 5 階第 3 講座室にて定例の学習会を行いました。今回は突発的に Verda Majo の “AMO KAJ MALAMO” の一節を読むことになりました。これは田中郁さんから要望があったものです。田中郁さんは奈良・長谷川テル顕彰の会の会員です。顕彰の会では、奈良・般若寺に長谷川テル訪問記念碑の建立を進めています。4 月 30 日に除幕式が行われることになって、今大詰めの段階とのことです。記念碑に以下の長谷川テルの有名な文章が日本語、エスペラント、中国語で記されます。

「私は仲間たちとともに、ありったけの声で日本の兄弟たちに呼びかける。誤って血を流してはならない。あなた方の敵は、海を越えたこちらの側にはいないのだ。」その全文の箇所が知りたいということで Verda Majo のコピーを持って来てもらいました。みんなで読んで訳しました。本田照美さんがかつてエスペラント相撲で読んだことがあったので大変助かりました。その後、”Gerda malaperis”13 章を読みました。出席者は中西とし子さん、本田照美さん、田中郁さんと竹森です。

また学習会の最中に同じく顕彰の会の宮城恭子さんから突然電話があり、先に記載の長谷川テルの言葉、エスペラントで正しく引用されているか最終確認したいとのことで、急遽学習会後に西部公民館に駆け付けられました。寺島俊穂さんとやり取りされていてこれがエスペラントの元の箇所というところを入手したのですが字がつぶれていて読めない。困っていました。結論的には Verda Majo の掲載箇所の文章と同じという結論になりました。

［←竹森 浩俊］

サカモトショージさんが急逝された際、KLEG は大きな危機に陥った。

染川隆俊さんが 1997 年 3 月まで事務局長代行を引き受けてくれることになったが、次年度からは西尾さんが事務局長の座を引き継いでくれた。そこで彼が取り組んだのは、事務所の改造である。今まで大阪市内への移転を展望していたため、事務所の改造は行っていなかったが、当分はここに落ち着くと決め、浴室や押し入れを撤去して、大量の書棚を確保し、販売書籍の保管・取り出しを容易にしてくれた。

出版への意欲

彼は知財関係の専門家ということもあって常に出版への興味を持っていた。彼が手がけた出版物をあげれば、2001 年第 88 回日本大会（宝塚）の記念品となった ”Flambirdo”。手塚治虫『火の鳥』未来編のエスペラント訳である。また、2016 年第103 回日本エスペラント大会の記念品として翻訳出版した「ダイナミックレイク琵琶湖から世界へ」。この出版に関しては、別項の大西真一さんの弔辞をお読み頂きたい。

2022 年には “Ĵunko Kantas Esperante” の web 配信を目指していたが、体調不良で手を引かざるをえなくなったのは、心残りであったろう。このアルバムは、西尾さんの計画そのままの形ではなかったが、CD の発行として実現した。

他にも彼の功績として触れずにはおられないのが、日韓問題に関する活動である。日韓関係史シンポジウムの開催や共通歴史教科書の出版など、彼の功績は多大である。

エスペラントの価値が見直され、問い直されている今こそ、KLEG にとって彼の新たなことへの挑戦力を期待していたのにまことに残念でたまらない。Pacon al lia cindro!

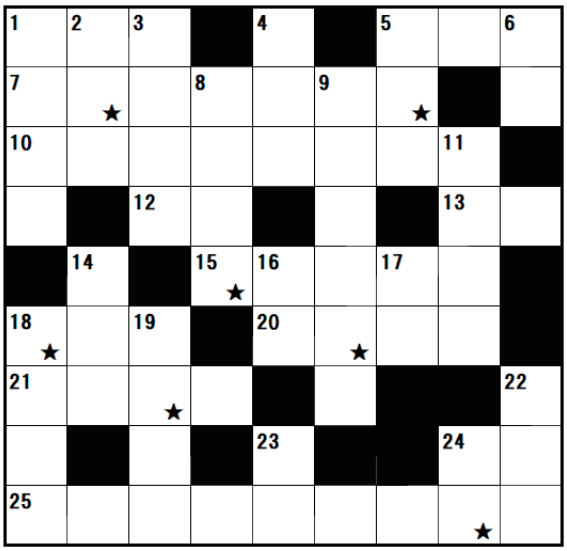
Vortkruca enigmo

TAKEMORI Hirotoŝi

Vicigu adekvate 7 literojn trovitajn en la kvadratetoj kun stelo. Tiam vi akiros nomon de la insekto, kiun iuj amas aŭ aliaj malamas.

Sendu la trovitan vorton kiel solvon de la enigmo ĝis la 20-a de marto, paperpoŝte al la ofiejo de KLEG, aŭ retpoŝte al <lamovado@gmail.com>

Rimarko: ĉiuj vortoj ne portas finaĵojn.



Horizontale: 1. Nuntempe katoj ne manĝas ~ojn. 5. Ligilo, konsistanta el metalaj ringoj, kunigitaj unu kun alia. 7. Multaj homoj mortis pro la ~o. 10. Galileo ~is, ke la Tero moviĝas. 12. ~veni, ~iri, ~doni. 13. Fiŝo saltis ~ akvo. 15. Miopulo ne kapablas legi la etajn ~ojn. 18. Li aspektas ~a. Eble li tro drinkis lastnokte. 20. Belaj floroj havas ~ojn. 21. Vi povas aĉeti poŝtmarkojn ĉe ĉi tiu poŝt~ejo. 24. Por ~i ĉambron en Tokio, li subskribas ~kontrakton kun dommakleristo. 25. Multaj homoj kutimis iri al Havajo por sia ~o..

Vertikale: 1. Ŝia revo fariĝis ~a. 2. Sovaĝa porko. 3. Oni povas nomi katon eta ~o, same kiel ~on granda kato. 4. Printempo ~as, aŭtuno rikoltas. 5. La oficiala nomo de ~io estas ~a Popola Respubliko. 6. Ĉu vi konas lin? ~ bedaŭrinde. 8. Galois, matematikisto, perdis sian vivon en ~o. 9. Li portas barbon, kiu kovras ne nur la ~on ĝis la lipo. 11. Kiam Usono ~as, Japanio malvarmumiĝas.14. Unu ~o, du ~oj, tri ~oj... Mi ne povas dormi. 16. Hund~o, kat~o, kok~o. 17. Akv~o, neĝ~, riz~o. 18. La utao estas japana klasika ~o el kvin versoj. 19. En kelkaj landoj kiel Francio, mezgrada lernejo, pli alta ol gimnazio. 22. La milito detruis multajn urbojn kaj devigis la plej multajn el la loĝantoj ~i antaŭ ol la armeo povis invadi. 23. Ge~oj ludis klaran rolon rilate al la zorgado de la infanoj dum la gepatroj laboras ĉu hejme ĉu ekstere. 24. Lago Biŭako estas ~ plej larĝa en Japanio.

La solvo al la januara enigmo: KUNIKLO

La ĝustan solvon donis 13 legantoj:

Sayuri
CA
本田 照美
島津 泰子
濱田 國貞
平井 倭佐子
松川 まきこ
TADA
にし のりこ
Grebo
水渡 篤子
武藤 たつこ
Kacu

D	E	M	**O**	K	R	A	T	**I**
E	■	I	R	■	A	N	■	E
K	A	**N**	D	I	D	A	T	■
■	Ŭ	■	I	T	I	N	E	R
Ŝ	T	O	N	■	**K**	A	N	■
I	■	■	A	M	A	S	■	D
P	L	**U**	R	A	L	■	N	E
■	O	R	■	R	■	E	B	**L**
E	**K**	B	A	T	A	L	■	T

楽しい作文教室（139）成績

13 人の方から応募がありました。( ) 内は留意事項です。

うん、良いね：Lumo(② riversando), Drako(②未来形 ?), Ivajo(① ĝis+ 対格 ?), yosie, Celejo(④ ĵus), ikona。

良いね：組曲 , Jasuko(① ĝis+ 対格 ? ② subeniris), 松村 (② al+ 対格? ③ ekfaradas), Eiko, CA(② subiri), Haveno(② al+ 対格?), はるちゃん (② disendi ③ Abulpte)。

Mikspoto（当欄は敬称略）

★1月26日付「しんぶん赤旗」に「命を大切にする世の中目指し歌い続けたい」という見出しで、野田淳子がインタビューを受けている。五段抜きの記事で写真入り。副見出しに「全曲エスペラントのCDを発表」とあり、記事の中では「エスペラントは、ポーランド出身のユダヤ人の眼科医ザメンホフが、1800年代に創案した国際語です。みんながわかりあえて、自由で平等。そんな精神にあふれていることばです」という説明も。また自作の歌「時を超えて」にもふれているが、これは1943年に亡くなったエスペランチスト宝木寛のことを歌ったもの。

［←堀 泰雄］

★1月9日付朝日新聞群馬版に、堀泰雄著『令和・足尾三十六景』の紹介が四段抜きで。「元世界エスペラント協会理事の堀さんは、世界の人にも知ってほしいと国際語エスペラントと日本語の対訳にした」と書かれている。［←堀 泰雄］

※この本については、裏表紙の広告を参照してください。

第71回関西エスペラント大会

2023年6月3日（土）4日（日）
会場　イーグレ姫路

楽しい作文教室5月号課題（3月20日締切）

①村議会の多数が市への編入に賛成だった。
②だが近くとはいえその市は山向こうにあった。
③村の小学校に通う子供達はどうなるのか？
④市の小学校は村から通うには遠すぎる。
（ヒント）前号の続きです。併合する aneksi ion。konsilio、kvankam を調べましょう。
日本語の原文の内容が、相手にはっきり伝わるように考えて訳してください。
送付先：
［郵送］〒674-0092 明石市二見町東二見515-1-811
塚本 猛
［電子メール］c_tak@esperanto.ne.jp
（件名に「作文」の文字を入れてください）
添削は受け付けておりませんのでご了承ください。

KLEG 事務局だより

★棚卸しは，例年3月の最終土曜日に実施していますが、今年はVintra Lernejo と重なりますので、31日（金）10時から実施します。お手伝いいただける方は、事前に事務所までご連絡ください。交通費と昼食代を支払います。

★3月は決算月ですので、個人会費やLa Movado購読料の更新がまだの方は、よろしくお願いします。該当者は宛名ラベルに「会費(誌代)切れ。乞う継続」と記載しています。KLEG加盟ロンドも、会費の支払いは3月の委員会(3月18日)までにお願いします。

★宮本義人さん（個人会員）が大西真一さんの後任として月曜日の当直を担当することになりました。

KLEG後援会へのご寄付

（2022年12月、敬称略）

菊島 和子	10,000円
匿名（切手として）	10,000円
匿名	5,000円
谷川 弘	1,000円
匿名	1,000円
木元 靖浩	950円
伊藤 俊彦	600円
河瀬 薫	600円
桜井 大二郎	600円

また、宮本義人さんからパソコンのキーボードが寄贈されました。

ご支援、ありがとうございます。

ワン・ワールド・フェスティバルに参加

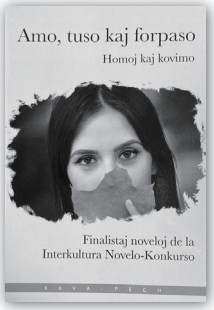
2月4日（土）5日（日）、大阪市北区扇町で第30回ワン・ワールド・フェスティバルが行われ、関西エスペラント連盟がブース展示をした。

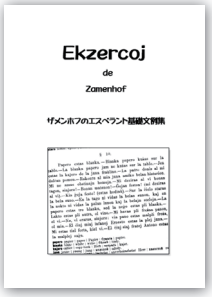
詳しい報告は次号で　。

訂正とお詫び

2月号P.10「エスペラント普及会の越年合宿」の記事中、参加者を51人としていますが、正しくは62人です。講師と事務局のみなさんを数えていませんでした。お詫びして訂正します。　（編集部）

2023 年 3 月 15 日（毎月 15 日発行）第 865 号　　1966 年（昭和 41 年）8 月 30 日第 3 種郵便物承認 ISSN 0915-6038





★　新刊・新着　★

Amo, tuso kaj forpaso　1400 円

コロナ禍で生きる人びとの姿を描く短編小説集。多文化小説コンクールの成果。間宮緑の Antaŭ la truo de kuniklo を収録。A5 判、113p.

Ni ĉiuj estas malsamaj　1200 円

一人ひとりが異なるわたしたち、認めあい多様性を尊重することの大切さを説く絵本。Tracey Turner 文、Asa Gillard 絵。A4 変形判、48p.

令和・足尾三十六景　800 円

堀泰雄著。富国強兵策を支えた足尾銅山。産業遺産がかつての繁栄を伝える。スケッチと文で足尾の過去・現在・未来をたどる。A4 判、48p.

★　学び、深めるエスペラント　★

エスペラント　日本語を話すあなたに　880 円

藤巻謙一著。日本語と比較しながらエスペラントを概観する。新しい視点で学ぶエスペラント。

エスペラント中級独習　2200 円

藤巻謙一著。通信講座指導の成果を活かした練習メニュー満載。朗読ＣＤ（ＭＰ３形式）付き。

エスペラント文法の散歩道　1000 円

「単数か複数か」「いろいろな de」「la の用法」など文法知識の整理と活用に（改訂新版）。

エスペラント運動を考える－ La Movado 誌から　1000 円

本誌掲載の論説 56 編を収録（峰芳隆編）。運動の現在と将来を考えるための好個の一冊。

Ekzercoj de Zamenhof　300 円

「エスペラント基本文例集」。ザメンホフの “Ekzercoj” と ”La Feino” を初心者のために再編集。

Esenco kaj estonteco de la ideo de lingvo internacia　600 円

ザメンホフによるエスペラントの原点を示す論文。

★　小西岳の訳で読む日本文学　★

Postmilita Japana Antologio　1500 円

戦後日本文学選集 (小田切秀雄解説)。小西訳は安部公房「闖入者」、野坂昭如「火垂るの墓」。

Noveloj de Akutagawa Ryûnosuke　1000 円

「蜘蛛の糸」「蜜柑」「早春」など対訳芥川集。

Kuru, Melos !　350 円

太宰治「走れメロス」。原作テキスト付き。

Nokto de la Galaksia Fervojo　1000 円

宮沢賢治「銀河鉄道の夜」「グスコーブドリの伝記」「シグナルとシグナレス」など全 5 編。

ご注文は郵便、ファクス、電子メールで。送料は実費。現品と一緒に請求書を送ります。支払いは振替口座で。

編集ノート

山田義さんによる Kajero libervola は今号が最終回です。たいへんご苦労さまでした。テーマは不問ですので、執筆者を大々募集中です。　（みやもと）

編集部宛連絡・投稿は<lamovado@gmail.com>へ

発　行　所：ラ・モバード社　編集：相川 節子　発行人：染川 隆俊　定価280 円　送料63 円　1 年3800 円　送料共
本　　局：一般社団法人 関西エスペラント連盟内　561-0802 豊中市曽根東町1-11-46-204
電話（06）6841-1928　ファクス専用（06）6841-1955　電子メール：esperanto@kleg.org
振替口座 00960-1-60436「一般社団法人 関西エスペラント連盟」　ホームページ：http://www.kleg.org
九州支局：九州エスペラント連盟内　859-0407 長崎県諫早市多良見町シーサイド 2-190 盛脇保昌方 電話 (0957)43-4352
中国四国支局：中国四国エスペラント連盟内 763-0063 香川県丸亀市新浜町 2-4-18 小阪清行方 電話 :(0877)22-4771